



中村俊定文庫
文庫 18
787



布目





文政二己卯之年

歳且



日の物や 七十四篇 檜門 七十一篇 松 古江
 え日 七十一篇 海 云々
 拾 七十六篇 子 七十六篇 葉 帰瓜
 も 七十六篇 花 保寿
 玉 八十篇 葉 江葉

始

半日葺紙

半日葺紙
 半日葺紙
 半日葺紙

ふしの春

鶴のしあ身はひびりや新の春 純美 雨丹

池鳥の解はききくくあまか エハ 江山

子の戸もあまの味くお福毒件 アリタ 南山

二つものあまの味くくくあまはき 三次 巴流

お後月代がききくくあまの味く 石見 花雄

あまの味はききくくあまの味く 石見 露月

大あまの味もあまの味くく おの春 梨雪

鶴の味はききくくあまの味く 一歩女 松月

ひつちの味もあまの味く ヨシ原 起石

あまの味もあまの味く

あまの味もあまの味く エト 国村

あまの味もあまの味く

あまの味もあまの味く

あまの味もあまの味く 多岐尾 玄陸

乾坤之部

厄明の目よ又未や 劫老 篤老

胎曲るも 活 十丈

山里 イセ 六昌

イセ 月桂

喜 イセ 巴山

口 本郷 護六

解 本郷 雨丹

古 本郷 如節

鶯 石 渚嵐

音 石 無已

延 口カサ 雲居

魚 大坂 長砂

供 女 宇柏

眼 女 文衣

醋 元 露宿

一 元 古江

朝 元 蘆合

春雨よまゝがめしうういその鶴 蘆洲
 鶺鴒のつれ卵や 東風の吹 上総 白老
 神さけの松もめれて春の風 美角
 人のききもこのころきこり平野の風 ヨシタ 川徳
 小笠干もえも暮れや 月の筋 姦元 冬色
 せ閑せ、せ戸ちよせ、いあうめきわ 庭竹
 曙の薫ももすもや 喜妙山 ミフ 鶴声
 手松のまゝまののおよ余りわ ミヨシ 一松
 涉ちの蓮の葉のころころ蹴月 ヨシタ 瓶左

飛狸ちの月い大まけり 蹴月 後右田 可涼
 古里いまきくぬきり 蹴月 吳 金莫
 ちの園の水仙さくも 春の月 坊所 自笑
 夏よりのよ流すふらゆや 春の月 石 梨田
 笑ふも〜まわりのやせん春の月 伊豆 一瓢
 鈴くす鳥よめえきんまのる 越中 村行

植物

雨二夜皎夜の 暮らもや 三次 儲一

田

梅折や花久水もよのぼる 凡 荷番
 梅咲て鄰同きまら 新無うふ 南山
 浪の塵もさきみ那梅の吹まら ヨシ来 霍江
 世の中い梅の物も月夜うふ ミラ坂 素蘭
 鼻の風もらぬ散ら 石 志溪
 梅柳一庭りふ海も決ひら 亀雄
 そのまの奪教 甲斐 風山
 鋤地と春戸 漫く
 夕風が上も 凡 九十

芽柳やき平の道志の二月忌 春魚
 る 桃泉
 春の 春屋
 大の 石 楓溪
 春戸の物 一河
 と 大坂 魚眼
 河 洛 備美
 一 イセ 其文
 春柳の 素白

春物も流るる哉此の馬 佳一
 吉柳や招弁や水の二處 武陵
 吹内は野のゆるさささ 土方
 化務は新のゆるささ 山根 石
 門は坂のゆるささ 下後 新翠
 松路は流るるゆるささ 松嶋
 夕梅もゆるささゆるささ 東湖
 世道や出り来りゆるささ 下後 万九
 散るるゆるささゆるささ 月章

月の雨梅ゆるささ 笈史
 夕茶や三井の末寺の通橋 一有
 花守の妻の梅ゆるささ 春厓
 ささ花の中ゆるささ 雲居
 杉陰はゆるささゆるささ 三都良
 未基をゆるささゆるささ 素蘭
 蝶鳥の志ゆるささゆるささ 十茅
 春をゆるささゆるささ 石 花山
 花のゆるささゆるささ 岳転

月花の影あり鳴の海

大坂

不度

梅の影あり春の桃の影

其雀

梅の影あり春の桃の影

イヨ

其兆

梅の影あり春の桃の影

ツレ

曙堂

梅の影あり春の桃の影

對芦

七のやいふつ所の睦

素主

梅の影あり春の桃の影

美角

梅の影あり春の桃の影

雨丹

其雀の影あり鳴の海

其雀

梅の影あり春の桃の影

寺家

柴籬

梅の影あり春の桃の影

大坂

井眉

梅の影あり春の桃の影

ま雨

梅の影あり春の桃の影

唯信

甘童

梅の影あり春の桃の影

彫刻

閑草

梅の影あり春の桃の影

木容

梅の影あり春の桃の影

シナ

霞霄

生類

苔よふあかほほやあかしの空

江尾

苔のまゆめあかしの空や井の蓋

大坂

三浦人

苔よふあかしの空やあかしの空

七井

其仙

蒼の上よあかしの空やあかしの空

上麻

柳知

蒼のやあかしの空やあかしの空

上麻

文甫

翠の丘あかしの空やあかしの空

石

露月

翠の丘あかしの空やあかしの空

石

松月

翠の丘あかしの空やあかしの空

石

吾風

大那よあかしの空やあかしの空

雨丹

秋のりあかしの空やあかしの空

荑令

揚のりあかしの空やあかしの空

石

以石

河のりあかしの空やあかしの空

ヨシタ

礎平

橋のりあかしの空やあかしの空

羽州

素来

橋のりあかしの空やあかしの空

湯殿山

淋山

橋のりあかしの空やあかしの空

一ツタ

淇江

茅のりあかしの空やあかしの空

女

紫風

茅のりあかしの空やあかしの空

八

曾外

さみれや子の屍を昔の衣
 席の戸も開きゆく水み月下 起古
 ささねおきこゆえぬる意無
 金英
 水や月や澄みゆく外なき人守筑後 慶五
 ぬ乎月も高きまうや露如珠二ト 道彦
 亀のむし人おんそ居る意者お
 巴流
 能るま洗ひぬせし早うれ石 里泉
 小酒屋の夕飯時やまきの御
 梧来
 おもたや小島の身よ樹も人ゆる
 芽令

心と遠客を設けや其の月 紫風
 青牛の尻吹却や 夏は月 文衣
 夕まや 在りまの程あり子 露月
 櫓い古し麻の風 薫る 土方
 水まよおぬのし信 風薫る 雨舟
 馬崎して龍風薫る 意者うれ 芦洲
 山里けうしゆさへ清くおくれ致皮 沙鷗
 甘みの穢るものよ清みの櫓しる音 云桂
 すしきや 波の揺り波う巻下用 羅風
 十

魚賣の舟をりりり草の心石 夕嵐
依る舟や根河の心二十 何頼
甘き舟や多き舟ぬこ舟五讚 尚海

生類

雲の宿借里を困子鳥カキ 梨冠
志高の江のまゝ 荷香
口先の舟のな鳥ありり子 鶴彦
舟のまゝ舟や吹舟石 如仰

龍の舟も目も舟もアツ 申高
二カも舟も舟も時鳥 美角
舟も舟も舟も舟も花山
舟も舟も舟も舟も徐佐
舟も舟も舟も舟も曙堂
舟も舟も舟も舟も木海
舟も舟も舟も舟も素白
舟も舟も舟も舟も白圭
舟も舟も舟も舟も梅御女

板のあつの中をほじりてあつの厚 サ又キ 木端
 とんちくのやうな板のせうぶ 石 亀白
 板のうた、板のうた 致皮 金郎
 丹波のうた、丹波のうた 浮武
 丹波のうた、丹波のうた 雨丹
 丹波のうた、丹波のうた 起石
 丹波のうた、丹波のうた 桺知
 丹波のうた、丹波のうた 一蓬
 丹波のうた、丹波のうた 嘯二

丹波のうた、丹波のうた ト総 孔集
 丹波のうた、丹波のうた 女 英之
 丹波のうた、丹波のうた イヨ 玄午
 丹波のうた、丹波のうた サ日市 枕流

混雑之部

丹波のうた、丹波のうた 素主
 丹波のうた、丹波のうた 一河
 丹波のうた、丹波のうた 半拍

甘き山ゆけの葉ふけすりタフサのり 桃南
 帷子の舞のついでヨシ京の舞イ 舞を
 見わたるといふつらりる我象フシコ 我山
 船飯の加減よのりり 浪の氷 一洲

秋乾坤之部

新月やうつくしむの星のり
 雨丹

きたれとて舞舞うりよのりり
 舟より川やち庵を獨り上南のり 夏白
 ちのれやうけ戸は結らるる歌イセ 鶴守
 秋の山や鳴るるれもりのえ 古江
 おのれとて舞舞うりよのりり日向 梅雪
 帰くし夕日のたつたれもりのえ 獲合
 七よのりり舞舞のちあいのな 一冬
 人のききも流るりやその月 庭竹
 七よのりり舞舞のちあいのな 荷香

川の川流やふたつを
こら 秋奉
 川もあもあつて
 櫻泉
 七つや小葉の二葉もあはれ知
下迄 鬼郷
 七つや新の葉もあはれ知
 麻丸
 臨海や浪の波の波の波
 金郎
 いあつてもやあつてもあはれ知
 雨舟
 八歌はあはれ知の波の波
 梨冠
 暁や鳥の鳴るもあはれ知
 一洲
 夜もあはれ知の波の波
サ 其夕

白雲の波の波の波
下迄 素曉
 経るや一着の波の波
 宇拍
 白雲の波の波の波
後迄 李長
 白雲の波の波の波
 芦角
 白雲の波の波の波
 閑ろ
 白雲の波の波の波
 松月
 白雲の波の波の波
 楚石
 白雲の波の波の波
 聴水
 白雲の波の波の波
 江左

船もや一月のむけも虎の川 カケ 窺官
 船もや 雨のぬの 一鳴り ヨシタ 南亭
 その鳥ふ始めさうりり三日月 ミフ 雲虫
 息もあせくくもあもされ月 洛屯
 老よりと捨る無きさかしの月 露月
 磯のあま燦とく言や月見奇 大坂 蛭洞
 ざりつりや月おのころ人 八日庵
 さよの月ね一本の家替うか 雨丹
 捨あもさく 休日の始の月 三井寺 千乳

けのまも也捨ち月おのころ人 洛 雪雄
 三蔵のあまさかきとつ遊りて里 春魚
 毎替もあまのまも也月おのころ人 鶴江
 老のあまのまも也月おのころ人 保壽
 名月也 庵も捨すねれ歌 ヨシタ 檀園
 山ねも 案らと月おのころ人 日光 五錐
 伊や 晴りあま月おのころ人 朝舞 玉汝
 名月也 庵も捨すねれ歌 玄桂
 登りあまの銀つふね月 十六 廿古

花露なの位もあふほらと
 きくはるのくちまこいごの石の存女
 鳴るのいさよをめりたふ徳きこい
 五月のいづれけりもぬのこま
 もよふ夜おぼえりし柿の熟三六
 秋のききほのやまひの位もあふ
三六 大雨の秋のわろり 秋の暮三六
 大粒のふりくや 秋の暮
 川の舟のきふもあつるえて秋のき
三六 美角 文衣 芝風 風山 菊音 花雄 志後 不染 紫風

植物之部

一葉のあふ 秋のききほの位もあふ
 投擲のくちまこいごの石の存
 鳴るのいさよをめりたふ徳きこい
 五月のいづれけりもぬのこま
 もよふ夜おぼえりし柿の熟
 秋のききほのやまひの位もあふ
三六 大雨の秋のわろり 秋の暮
 大粒のふりくや 秋の暮
 川の舟のきふもあつるえて秋のき
 十五

千可 月桂 みち女 洪水 窓雨 紫籬

けりやまのよき 是程 三次 南塘
 無事の島の鶴の 様々の鶴 松宇
 鶴の鳴きこゝろ 萩の心 一河
 鶴のそとに押さえておす 仙芥 ヒコ
 ふそ枝の地をけい 萩の鳴きこゝろ 信州 馬来
 かこふそ月夜よりいそぎの上 澄阿
 雁のあつちの飛入す 三次 萬羽
 鳥のあつちの飛入す 小国 千代女
 鳥のあつちの飛入す 石 英之 女

和ふら来て枯穂なるなりぬ 節達 大坂
 得て人のあつちのまき ヨシタ 凡人
 鳥のあつちのまき 石 松崎
 きこも 蝶遊 加計
 つらくも鳥のあつちのまき 上開 孤栗
 雁のあつちのまき 上開 文甫
 雁のあつちのまき 上開 素白
 雁のあつちのまき 上開 里仙
 雁のあつちのまき 上開 三花

さへ浪中へ家もたて村もみち
 ずし海や苔の穂首が鳴す石 木戸
 白鷺の目よく見えて袖の人ゆり洛女 久理
 程ふく程破れ圓庵はあきり雪 雨丹
 家貧の舟も眼く程ふく程 對芦

生類之部

虫啼や 月夜の糸 一洲
 心

虫さくや海蔵の底の志をなげけ 如昂
 約幾のさるなほくやしの春 路山
 文六の解さひやき金くし 瀧嵐
 き金くしは啼や傾く油 血 蒼草
 舌つまな鳴るひくくしをくす 其鶴
 玉の来しし人の智あぬ門ゆふ 士方
 杉原の煙かひきくし一のみこく 曾外
 玉の原さくふを巻取れは何とく 玉浪
 丁啼て住居は助る 山泉 飛泉

春人や実込おろす 萩の果 湖白
 浦の松や しまあこ 一な起まらう
 一鳴りや 秋事ま 古ひ 国^ノ山 圭雨
 ささるま 流るま や 暮の 鳴 亀^ノ礎
 角折て 鳴と します 暮の 鳴 無已
 寝よ ぬるま ぬらや 雨の 沢の 松^ノ南
 雨の 目の まるま ぶらう 川^ノ板の 音 啼谷
 舟 地^ノ油 移て 葉^ノ山^ノの まるま 一松
 人^ノまは せと 葉^ノ山^ノの 後^ノ 雨^ノ初

春人よ ありや せん 枝^ノかじし 可涼
 猿の リ^ノや 猿の 海^ノは 鳴^ノまら 以石
 滝^ノか 毛^ノま ありや あり 浮哉

混雑之部

いづら 宿之句

虫の 春も 神^ノ秘^ノ修^ノり 浪^ノ此^ノ上^ノ 洛 蒼^ノ机
 神の 灯^ノの 移^ノま 修^ノえよ 春^ノの 舟 桂^ノ眉
 神^ノま じり 春^ノの 舟^ノま 舟^ノま 舟^ノま 美^ノ角

任がや松の上うら初うられ 吉田 一茶
 湖やうらうられてまきかた枝 淇水
 鶯を鳴らす春の空を夕一途 外遊
 松を思ふ松まほさきり夕一花 里風
 篠田やまきの志くうい海う吹 荻姜
 寺の鐘より秋しく水い 冬六 野揚
 船くればは舟鳥のけまき 尾道 若香
 道一のつらきうき山く 尾道 東翠
 大のまきあふうい河を戦う 尾道 巴山

志くもや比枝とぬ川の津路 唯好 淇園
 しくもや夕積むく松の下 一河
 志くもや山の胸中鶯の行 寺京 玉斧
 水鳥のあはれを船く 三原 良山
 船まねや大を追習 宇拍 宇拍
 船まねや大を追習 雨舟 雨舟
 志の降や 松宇 松宇
 志くも子まはるき 霍江 霍江
 志くも子まはるき 其雲 其雲

松を以て為すもさむは信くも
 井のほとりては静りて遊ひてを
 舟のまをさる方中んよりわ
 ちをさるにやうりてさくのを
 大雪や使まをさるに静るを
 灯と舟を以て静るに静るを
 大物なるを静るに静るを
 下流の園の踏刻くもさす
 下流の園の踏刻くもさす

嘯二
 琴女
 素白
 梧来
 湖白
 吳老
 鳳山
 圭雨
 龜雄

晴まよふ類生弱き心の運ニクマレ
 花の上を草頭
 人の塔のてん橋ありを石石

西坡
 聴水
 浦石

植物の部

川向ひあり合を中り大振川
 畑まのよりのさえ昔の枯を石石

思流
 麻丸
 志明

桔をなむるき柄の夕日の中

小泉

鯉冬

那う桔てつめくまう〜今年松

二六

一洲

山葉もや戸つめもすも并大松

玉山

少ゆ〜て庭のふきのき自ひりり

貞之

葉は花も小一時をいおのり重

文衣

葉のまやも宿るおらる山の家

兵庫

士方

拂ふも〜旅い〜
世にのま

穆丹

葉のいん〜し〜
橘

紫原

そ〜葉のふ〜
ちりり重

沙路

山〜葉〜
橘

女

志津

月影の葉ま〜
橘

江左

大根の太〜
橘

舜路

葉〜葉〜
橘

定雨

さ〜葉〜
橘

備美

葉〜葉〜
橘

窺官

花〜葉〜
橘

花雄

冬枯〜
橘

雨丹

庭〜の〜
橘

吾爪

たづなりしおきのよ枯野の寂梅子

借

藤彦

生類

燈火のこぼるくすや啼千鳥	古江
雪のこぼるくすや啼千鳥	蘆洲
又松が赤くすや啼千鳥	素屋
又松が赤くすや啼千鳥	野揚
又松が赤くすや啼千鳥	如節
又松が赤くすや啼千鳥	雪老

水もぬくこく熟を喰や	一冬
あつさの中よ悲鳴のま啼	鳴泉
雪のこぼるくすや啼千鳥	枕溪
雪のこぼるくすや啼千鳥	至棟
雪のこぼるくすや啼千鳥	一洲
雪のこぼるくすや啼千鳥	得后
雪のこぼるくすや啼千鳥	一洲
雪のこぼるくすや啼千鳥	箕山
雪のこぼるくすや啼千鳥	東枕

万を以てして多なるは破るは海原鳥
 五位階ももろれと合口の海原鳥
 こそきしぬもや自故の秋けりる
 ちきへのいさりのちきよきよきよ
 複喉よききくつよき男うれ
 報神のあよいあふくまふりわ
 男志年とつよきかきくり鯨とけ
 きとらけよその思つよか報とけ
 息のよ内か海原のちとくれ
 大坂
 無已 淇汀 麦坡 嘯二 路山 和切 薰令 美角 草津

混雑之部

幣啼て神のあまする嵐外
 神のあまは獲鉄のあのをうりま
 花きくはるはははは 里外未
 遠くもよきききききききき
 年々少信のあまあま子うら
 ね月のあまあまあまあまあま
 可涼 一有 美角 雨丹 玉浪

ふみ物字のまをてんまきあよ

伸みまろし五郎又絶つり西好公 東湖

埋まらぬ形吸らるるの燈る家 浮武

君戦うのさめて崩る指火かゝる 啼谷

手の毛の波ぬらき又桶ヨシタ 松嶋

世に取く三年ぬらや榎ヨシタ 双鳥

下京の納まのきよまヨシタ 困車

鞍のきよのさめ家ヨシタ 古江

歳暮

さくほり月や海まのあし船 滄洲

月の夜はワれて残し海まヒコ 古梁

すくほりぬくとあそヒコ 藪の鳥 巖冬

きよまイセ けぬまイセ けり年忘 春湖

きよまイセ けりやまイセ ぬ水車 帰氏

孫は喰ふおイセ 一年末堂 梅御

陰夜イセ のりイセ 鄰もイセ けりイセ 鈴屋 江山

若くも侍りて

ゆきと世を解くもやうく神の鳴

挂眉

子枯まききりく草履の

閑寂云々なりなり

春ぞとて世の心越への世の鳴

玄桂

多賀庵の春奇興

玄桂

昔小披や能きものかききり

日のきりか類片木の七叶

文衣

殊刈る山の山のけ下梅て

白圭

心まき世解か梳打ふる里

均嘴

有明の頃いおひ不深あふ

衣

給ひはるまじい妻の美うする

桂

有る事うたふくも書しるふらう海

嘴

何よりと世し船の世の目

圭

うき中世の鳥の幸自ふんけき
まの枝の醋ふ洞あつきて
ワもあまふ梓の弓はれあし
今そは殿の汐はよ出る
秋風のそらまはる松負えん
月のあまの人のあつたす
一うてくも虫う帰るよの路もあ
ワすれて流る甲斐の猿橋
菊藷の芽みゆるさきつ下

蛙 連 喚 蛙 衣 唾 圭 衣 蛙

二
かろうた筆の音をさるる
雛造る松庵うさるる人難
孫同ひするもは叱る山伏
せうしあま少くは年する又合拜
ちんちんきき一杖の書
あまの君うかすは見えん
うきうきあまの皆りすれ子
河を流るあまの柳火あま
小揚借るまは池の出離

河、蛙、河、蛙、河、蛙、衣

燒酎の美哉きうめをあらわ
 顔よ阿の風 さら 音
 汐さゆる入江の月を仔細に
 寫すもやうきいけふ河
 舟の戸を半遠のひかりに
 照らすも佳きうめをあらわ
 おとよの月の影をあらわ
 出づるも佳きうめをあらわ

、 河 、 蛙 、 河 、 蛙 、

ありきと味方の口は切も
 執筆

蘆洲

雲をうけて帰る夕天は
 廣く照る蝶二り 三り
 雀さう深山の木の葉を
 舞ひのほのまゝに
 秋も国のよき名を
 三

蛙 、 洲 、 蛙

ウ
セカミの甲斐より暮る世は後
銅鐸の聲も塵もぬき
瀧川のこぼれ水よりの暮る
坂東声の響く山伏
年よとや戸口ふさふさの
又ふたゝまの暮る世は
後暮る世の暮る世は
ちよとや戸口ふさふさの
虫の音のこぼれ水よりの暮る

蛙、洲、海、洲、蛙、洲、蛙

二、海、洲、蛙、洲、蛙、洲、蛙
人の暮る世の暮る世は
蛙子の暮る世の暮る世は
暮る世の暮る世の暮る世は
暮る世の暮る世の暮る世は
暮る世の暮る世の暮る世は
暮る世の暮る世の暮る世は
暮る世の暮る世の暮る世は
暮る世の暮る世の暮る世は

蛙、洲、蛙、洲、蛙、洲、蛙

河の底の響く小舟の呼声
風吹響る船のそと合
若松の木の玉垣も隠れて
枯草の影もあやしく
相河原の紙子のまきも
藜の枝もかたまり
板橋のまのあまの風ふすれ
神代村の能ふる名なほし
夕やみの昔もかくは神の神

河、陸、河、陸、河、

冠のうしろの春の別
夕やみの影も花の科も
あつ果を喰ひのほ

草、河、陸

對芦

鳥のこゝろの
葉のゆきも水のも
遠き舟のちつれも
風を待んと松植くお

松、陸、芦

春解の流るるもゆる草田
 うすむらさきも新緑の
 強もつよきまの春旭山
 手鍋のサ新を造作折
 あく短狐の草の序りて
 こゝろおほゆりー如木難職
 憂ふこゝろも楓の影をさかす
 ああのも月よかゝる序りて
 阿もこゝろも月よかゝる序りて
 芦 雉 芦 雉 芦 雉 芦 雉

こゝろおほゆりー如木難職
 憂ふこゝろも楓の影をさかす
 ああのも月よかゝる序りて
 阿もこゝろも月よかゝる序りて
 人びと 猿もふらふを放りけ
 手原の草も人の影をさかす
 花も焚那も人の影をさかす
 風の音も人の影をさかす
 鳴 雉 芦 雉 芦 雉

三花

息もふさふさの影も
 春もつよきまの春旭山
 手鍋のサ新を造作折
 あく短狐の草の序りて
 こゝろおほゆりー如木難職
 憂ふこゝろも楓の影をさかす
 ああのも月よかゝる序りて
 阿もこゝろも月よかゝる序りて
 拍芽

村のまはりの山を自にまて

まきののびる 鏡の石つま

月新うまののぼるのま

ひのちのちのちのちのち

毛織の糸の織の織の織

毛織の糸の織の織の織

毛織の糸の織の織の織

毛織の糸の織の織の織

可涼

一湖

芽花

湖

涼

芽花

涼

涼

湖のまはりの山を自にまて

西のまはりの山を自にまて

西のまはりの山を自にまて

西のまはりの山を自にまて

西のまはりの山を自にまて

西のまはりの山を自にまて

湖

花

涼

花

湖

芽

概泉

轆轤の口まねて今朝の秋

まきまひす秋早稻の初風

酒桶は月のまきくは流りき

沙灘を流すおののこき

籠へ籠の吐ききき

又籠へ時を尋る

とけぬ槐なだの横より至

志のひて行く志きの昆河門

里行

鳳山

泉

淑茂

梨冠

泉

茂

傘の漏りまきく洞 顔

勅うぬるをうらむ

湯館中をそはや中を

車御瓶のまきく

月峰一人のまきく下河

蓮のまきくまきく

牛の子う乳をまきく

まきく子まきく

咲花のまきく

泉

山

行

泉

山

泉

冠

まあしくて久ぬ伊勢の海つら
 雀子の始て粟ふ所者も凡や
 利休の筆子も松の香ひ
 朝の間又花下つ毛衣の着て
 化の解るぬ己の馬 契
 知る者よそくおるもかへ歌
 役の附とて胡柳うくく
 次保くも隠念るよるぬの傳
 鳥のさるの事とるやうくも

冠 茂 泉 冠 泉 茂 泉 茂

株揚の志も一又三一廿二本
 能いよそのす敷芭の小事
 二之丁おわりい存もたうありて
 まあこのもく中が噂話
 葉葉よかの附きある能因皮
 官のあふその能くそくあり
 能丹の文字を古風子書字之
 ううとくよふんをぬ人取
 本れよあそくもあう花の若中ん

行 泉 冠 官 泉

嘯る鳥のこゝろのまじり

筆

得書館のお話

宇拍

面あり雛のまじりる鳥のこゝろ

柳赤きく雛のこゝろのまじり

玄陸

水吉ふ池又家鴨の道ついで

鳳山

等入行もくみ玉像のまじり

師夷

即はちる月の鳴るも柳のまじり

曾外

こゝろや末枯る山風の音

渚嵐

夢のこゝろを老る心もまじり

陸

夜明けのこゝろを月がまじり

柏

晴のこゝろを夕陽のまじり

雲

豆蔵のこゝろを浮のまじり

山

伐出すと木を挽きし木の板

素圭

泣き声のこゝろを雨のまじり

外

月のまじりやうらなを心まじり

嵐

あはれのこゝろを地をまじり

陸

花のこゝろを蝶のまじり

柏

七車のそらなはいたるのり
十周のそらん少終も花のそら
きつらりーまらんののそ
圭山 亮

深山の嶺にそらん花のそら
廊を渡りあそびつらん
花のそらん少終も花のそら
きつらりーまらんののそ
圭山 亮

女も正物してそらん
兵車 撥齊

あそびつらん少終も花のそら
きつらりーまらんののそ
圭山 亮

空返の閑も小まの赤くして
 思の控りとも鞋めす中へ
 吾程もあつとゆふの影の影
 鏡井の鳴りし事隔れば
 片のうらみもあつたの影の影
 清和の影もあつたの影の影
 赤の影もあつたの影の影
 ①く病つとつらむ影の影
 中へもあつたの影の影

桂 翁 桂 翁 桂 翁 桂 翁

のとうたふらへ——油屋文彦
 空返の閑も小まの赤くして
 思の控りとも鞋めす中へ
 吾程もあつとゆふの影の影
 鏡井の鳴りし事隔れば
 片のうらみもあつたの影の影
 清和の影もあつたの影の影
 赤の影もあつたの影の影
 ①く病つとつらむ影の影
 中へもあつたの影の影

桂 翁 桂 翁 桂 翁 桂 翁

かくし襷袢の袖もくさくさ小三つ襷袢の
羽別紙をくさくさ襷袢の袖の裏と表を
ききく言はれ襷袢の裏と表をききく

三日舟の別をいふとき所をききく

豆之層をいふとき所をききく

紙布の襷袢も掃子減おらし

板金層をききく口解

滑り上りふききききききききききき

子尺のあやかし人あやかし

見おきぬ由かたりし相のきき

桂眉

桂眉

眉桂

袷の袖の裏のききききききききききき
きききききききききききききききき

きききききききききききききききき

きききききききききききききききき
きききききききききききききききき
きききききききききききききききき

桂眉

桂眉

遅来之部

於るの秋の別やうらうら 壽且

木に枯るるふもや山の家 牛棟

静まるとは秋夕の余りりり 九河

多れおやまあとの榎のおやを 里香

暑きもや毛虫の処す少ね原 常波

この月のまゝあふありあふ道

せんくふまの舞やふもま

船集のあふふあふふふ丹うま

澄る一羽枯れ残つてうらうら 竹葉

杉のあふふふのひらそむ夏の間 貫明

りんごの泣くもあやあやあやの風 狹山

砦道やあふあふあふあふの秋 巖平

三月のすもあふあふと遠入り 車丘

花んすも一葉あふあふあふあふ 霽衆

初まはれしとあふあふあふあふ

後ろしと秋の程あふあふあふ

緋栗やあふあふあふあふあふ

終

湖く足入く見え少者小
 露衆
 妻此日のまきけ咲や故のま
 如圭
 十日程船を旅守よ早月雨
 一海
 ふと後のもいふ用ちりおの月
 無能
 一心の程雲くうりけせ花
 池成
 日たさす也紅雲の中五江戸の古社
 桃父



廣寫平田屋橋
 萬版刻所
 南江入
 先
 書物仕立
 彫刻師
 廣國彦兵衛

